Ⅱ 遺 構

1. 遺跡の概観

国鉄奈良駅西側の調査地付近は、現在では商店と民家が建ち並ぶ市街地と化し、その地形的特徴を窺うことができないが、東から西へ緩く傾斜する地形にあり、佐保川と能登川が第四紀に入って形成した複合扇状地の末端部に位置し、現地表面標高は60.2ｍである。

調査地の基本的な層位は、地表から１：校舎建設に伴なう客土層、２：旧水田の耕土および床土層、３：遺物を包含する黄灰～灰褐色の砂質土層、４：黄褐色粘土層の順であり、現地表下約0.6ｍの黄褐色粘土層上面において遺構検出を行なった。黄褐色粘土層は薄く不安定な層であり、調査区西端では、拳大の礫を含む堅くしまったバラス層に移行し、南東部では部分的に消失する。また、北東から南西に向かって緩やかに下降しており、この緩傾斜面を埋める形で遺物包含層が水平に堆積する。遺構の掘り込み面は検出面にほぼ一致する。

土層観察のため、東西トレンチ西側において深掘りを行なった結果、西端の遺構面に一部露出するバラス層（無遺物層）が東に向かって急激に下降する状況を把握した。その斜面には粘土と砂が互層をなして堆積しており、この地域にかつて河川の存在したことを示している。奈良時代の遺構面である黄褐色粘土層は、この旧河川の最上層の堆積とみられ、微量ではあるが弥生土器や古墳時代の土師器を包含している。

fig. 5　調査地周辺航空写真（南東上空より白藤学園・平城宮跡方面を望む）

2. 遺　構　(fig. 6，PL. 4～9)

検出した主要な遺構はすべて奈良時代に属するもので、東四坊坊間路をはじめ、掘立柱建物８棟、掘立柱塀５条、溝３条、土壙などがある。以下、遺構の種類毎に解説する。遺構には、一連の番号を付し、遺構の種別を表わすため、ＳＢ―建物、ＳＡ―塀、ＳＤ―溝、ＳＫ―土壙、ＳＦ―道路等の記号を遺構番号の前に付して標記する。

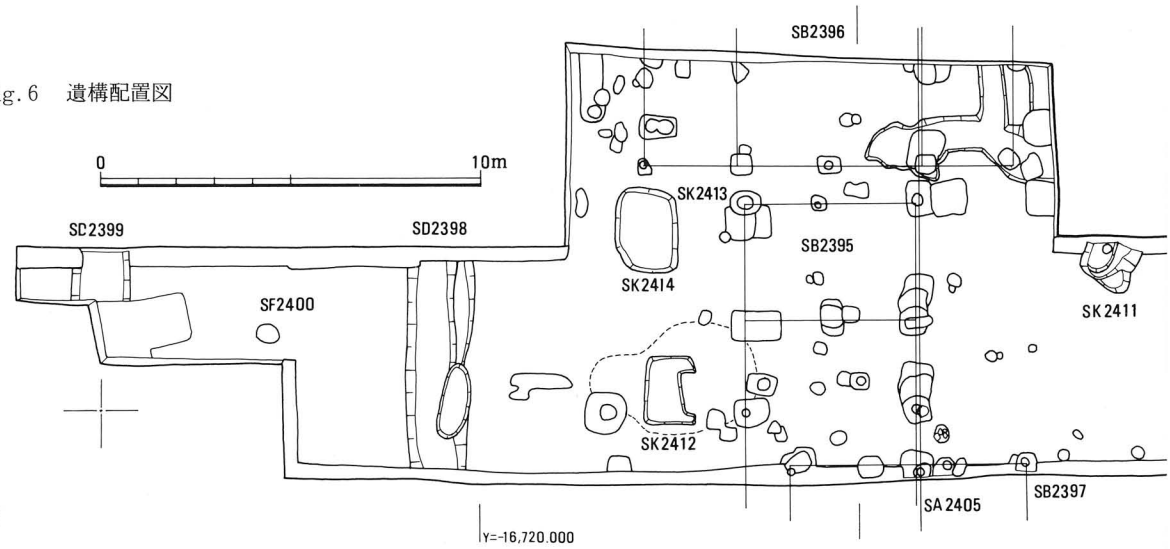
掘立柱建物

SB2390　南北トレンチ東辺に位置する南北棟建物。桁行５間（2.25 m等間)、梁間２間（2.4 m等間）で、身舎の東と南に廂を持ち、全体として６×３間の規模となる。身舎の南妻から数えて２間目に間仕切がある。廂の出は、東廂が3.0 m、南廂は2.4 mで、桁行総長は13.65 m、梁間総長が7.8 mとなる。掘形は一辺60～80cmの矩形を呈すが、南廂の柱掘形はやや小さい。身舎部に残る柱根は径約27cmを測るが、東廂の柱根は、それよりもやや細く径約20cmを測る。身舎の西北隅の柱穴と東北隅の柱穴には、柱痕跡のまわりに割石と平瓦片で巻いた根巻状の工作が見られる。礎板が存在した柱穴は、身舎西北隅の柱穴と間仕切部の柱穴であり、いずれも板材を使用している。西北隅の礎板は残りが良く、長さ約120 cm、幅約24cmの板材で、前述した根固め状施設の下に水平に置かれている。柱穴の深さは、多くは遺構面から60～80cm程度であるが、礎板が存在した前述の柱穴は浅く、遺構面から20cm程度で底にいたる。なお、身舎東北隅の柱穴から地鎮具と考えられる和同銭１枚が出土した。このＳＢ2390は、天平勝宝～天平宝字年間頃の土器を包含する土壙ＳＫ2406を切って建てられている。

SB2391　南北トレンチ南辺部にあり、ＳＢ2390と重複する掘立柱建物。桁行１間分（2.4 m)、梁間２間（1.8 m等間）を検出した。北側柱列の柱穴は、ＳＢ2390の掘形に大きく切られている。

SB2392Ａ・Ｂ　南北トレンチ南西部にある２間×２間の総柱の掘立柱建物。柱間は東西方

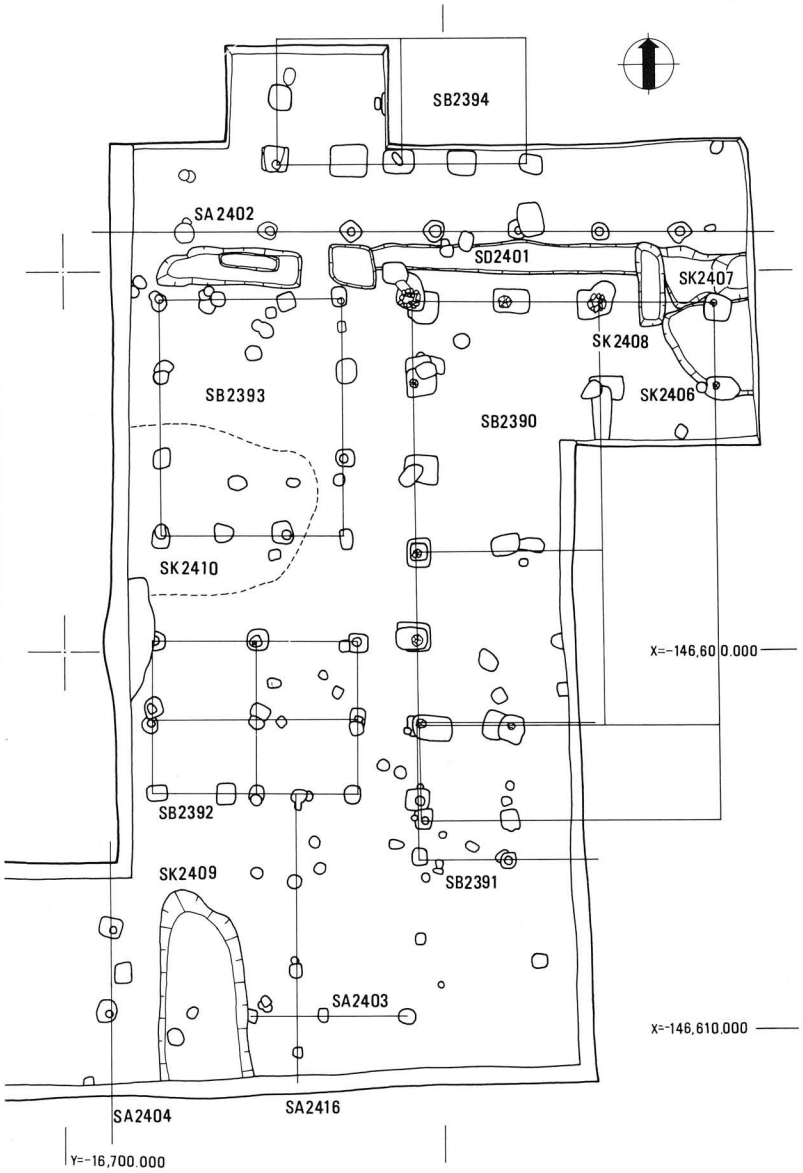
fig. 6　遺構配置図



向が2.7ｍ（９尺）等間、南北方向が2.1ｍ（７尺）等間。東西方向の中央柱列の南側に小さな掘形が重複する。この列の柱だけを取替えて組み替えたのであろう（SB2392B）。

SB 2392A・Bともに柱穴は一辺約40㎝、深さ約50㎝の小形の掘形で、Aの北側柱列中央掘形とBの西側柱列の中央掘形に、それぞれ径10㎝未満の細い柱根をとどめる。柱間や柱の配置から倉庫風の建物と考えられる。柱掘形埋土中には、奈良時代前半期の土器片が含まれている。

SB2393　南北トレンチ北西部にある桁行３間（6.3ｍ）、梁間３間（4.8ｍ）の南北棟建物。柱間は、桁行が７尺等間、梁間は中央間６尺、両脇間５尺となる。奈良時代前半期の土壙SK 2410を切って建てられる。SB2392と同様に小さな柱穴であるが、掘形埋土中に多量の土器片を含む。中でも注目すべきものは、南妻柱列の東第２柱穴の西壁際から出土した羊形硯である。この柱穴の柱痕跡は掘形の東南隅に存在するところから、後世の混入品とは考えがたく、建物の建設時に掘形の埋土中に偶然まぎれこんだものか、あるいは意識的に埋納されたものであろう。掘形出土土器はSK 2410出土土器と接合する。



SB2394　南北トレンチ北端にある桁行４間（6.6ｍ）、梁間２間（3.3ｍ）以上の東西棟建物。中央間に間仕切と考えられる柱穴を持つ。柱間が1.65ｍ等間と狭い割には柱掘形が大きく、一辺約0.7ｍ程の矩形を呈す。南側柱列の東第三・第四柱穴の掘形埋土から奈良時代前半期の土器片が出土している。

SB 2395　東西トレンチ中央にある南北棟建物。桁行２間（4.8ｍ）以上、梁間２間（4.5ｍ）の身舎に北廂が付く。廂の出は3.0ｍで、廂の中央の柱穴は他に比べ小さくやや西側に偏る。柱間寸法は桁行

が2.4 m（8尺）、梁間が2.25 m（7.5尺）である。東側柱列は南北塀ＳＡ2405の柱掘形と抜取穴を切り、また西側柱列は奈良時代前半期の土壙SK 2412を切って掘られる。

SB 2396　東西トレンチ中央北辺にある桁行2間以上、梁間2間の南北棟建物で身舎の東西両面に廂を持つ。柱間は、桁行・梁間・廂の出ともに2.4 m（8尺）等間で、掘形は建物の規模のわりには小さく、一辺50cm未満の方形の掘形である。

SB 2397　東西トレンチ中央の南壁際で検出した掘立柱建物。東西方向に3間分（2.1 m等間）を検出したが、棟方向および規模は不明である。

掘立柱塀

SA 2402　南北トレンチ北辺にある東西方向の掘立柱塀で、6間分（2.2 m等間）を検出した。掘形は一辺50cm前後の小形の掘形で、すべてに径20cm前後の柱痕跡が認められる。

SA 2403　SA 2416に直交する南北塀。2間分（2.1 m等間）を検出した。

SA 2404　東西トレンチ東辺にある南北方向の掘立柱塀。2間分（4.4 m）を検出したが、更に南北にのびる。柱間ならびに柱掘形の形状がSA 2402に似る。柱筋を北に延長させると、ＳＡ2402の柱位置にあたるところから、SA 2402に取りつく可能性が高い。

SA 2405　東西トレンチ中央にある南北方向の掘立柱塀。4間分を検出したが、柱間は南から3間目が3.6 m（12尺）と広く、出入口として使われた可能性がある。他の柱間は、2.4 m（8尺）等間。柱穴は、柱抜取穴が重なるため全容をとどめるものはないが、一辺0.8 m程度の比較的大きい掘形である。南半でSB 2395の掘形に重複する。

SA 2416　南北トレンチ南辺にある南北方向の掘立柱塀で、3間分（2.1 m等間）を検出した。北端はSB 2392南側柱列に取りつく。

土　壙

SK 2406　南北トレンチ北東部にある土壙で、南北幅約2.6 m、東西幅約2 m以上、深さ約0.5 mの不整形な皿状の土壙である。埋土は5層に分かれる。遺構面から約30cm下位には、厚さ2～3 cmの薄い灰層がほぼ水平に堆積する。各層から奈良時代後半期の土器片が出土した。

SK 2407　南北トレンチ東北隅にある不整形な土壙。南半部をSK 2406によって切られるために全形は不明。深さ0.45 m。

SK 2408　南北トレンチ東北隅にある長さ2.2 m、幅0.7 m、深さ0.65 mの長方形土壙。東西溝SD 2401を切って掘られている。土壙の中位から和同開珎約100枚が固まって出土した。奈良時代前半期の土器片を若干出土したが、多くはSD 2401出土土器と接合する。

SK 2409　南北トレンチ南端にある南北長4.9 m以上、幅約2.1 m、深さ0.15 mの浅い土壙。奈良時代末葉の土器片・瓦片が出土。

SK 2410　南北トレンチ西北部にあり、SB 2393に重複する不整形な土壙。奈良時代前半期の土器を多量に出土したが、明確な輪郭を把握しがたい。

SK 2411　東西トレンチ東部の北壁際にある土壙。奈良時代前半期の土器片が少量出土。

SK 2412　東西トレンチ中央にあり、SB 2395 と重複する不整形土壙。当初東西 4 m以上、南北 2.5 m以上の不明瞭な輪郭を捉えたが、掘り進めるに従い縮少して逆「コ」字形の土壙になった。深さ 0.3 m。SB 2410 同様、奈良時代前半期の土器を多量に出土する土器溜りである。

SK 2413　東西トレンチ中央SB 2396 の南にある一辺 0.8 m程の方形土壙。SB 2395 の掘形と重複し、切られている。奈良時代前半期の土器片が少量出土した。

SK 2414　東西トレンチ中央、SK 2412 の北にある幅 1.6 m、長さ 2.2 m、深さ 0.5 mを測る長方形土壙。奈良時代前半期の土器が少量出土している。

溝

SD 2398　東西トレンチ西辺にある幅 1.5～1.75 m、深さ 0.3 mの素掘りの南北溝。東肩に段をもち南半部に撹乱をうける。この溝は八坪と九坪を画す東四坊坊間路の東側溝にあたる。遺物は奈良時代前半期の土器片が少量出土したにすぎない。

SD 2399　東西トレンチ西端にある幅 1.6 mの素掘りの南北溝。深さ 0.25 mを測る。四坊坊間路の西側溝に相当する。

SD 2401　南北トレンチ北辺にある幅 0.8 mを測る素掘りの東西溝。途中で途切れるが溝底レベルは東に向って下降する。坪を南北に 4 分した線上にほぼ位置する。

通路・道路

SF 2400　SD 2398 ・SD 2399 を側溝とする南北方向の道路遺構。平城京条坊の東四坊坊間路にあたる。削平のためか路面上には整地土がみられず、遺構面は地山の灰褐バラス層となる。遺構検出面での路面幅は 7.3 m。東西両側溝の心々距離は 9.0 m（3 丈）を測る。

SF 2415　今回の調査では検出していないが、四坊坊間路東側溝SD 2398 の東に想定できる築地塀もしくは木塀と、SA 2405 との間に存在すると推定される南北方向の通路。

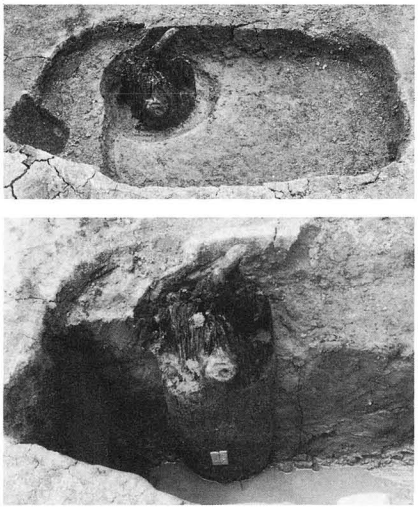


fig. 7　SB 2390 柱根残存状態

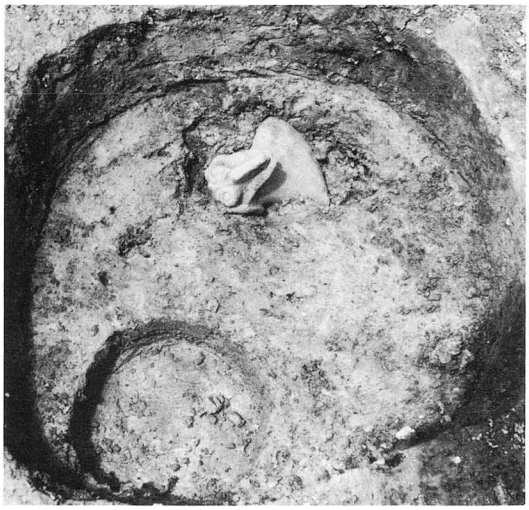


fig. 8　羊形硯出土状態